ISSN 0916-1368

Contents

・【巻頭エッセー】心の裡に築くもの …花岡千春●表紙

・Welcome to our Library　●2 ～ 3

・【卒論報告】デジタルネットワーク時代の新しい
　音楽市場戦略と聴取行動の変化…下森也実●4 ～ 5

・館長室へようこそ ㉘ …古川聡 ／ 雑誌の部屋 ⑲　●6

・2017 年度ぱるらんど総目次　●7

・Information　●8

Parlando

ぱるらんど「語りかけるように歌う」という意味の楽想記号です

No. 298

【巻頭エッセー】心の裡に築くもの

花岡 千春

たかだか数十年ほどの人間の一生など、本当にはかないものかもしれません。それなのに、時間が限られていることは棚上げにし、ひとは日々のことをやり過ごすだけで、人生の大半の時間を使ってしまいがちです。恥ずかしながら、まさに僕もそんな人間の一人です。

もっとも、生まれた瞬間から、私たちの命がひたすら終焉の時に向かっているにせよ、無常を嘆くことばかりが人生の意味でないことくらいは、私たちもよくわかっています。

結局、私たちは自らの人生を豊かにしたいと思いつつ、うつし世を漂っています。物質的な面での幸せの希求が第一かもしれませんが、どっこい精神的な充実を願う気持ちだって持っています。自分の裡に、より多くの知を蓄えようという衝動はその一つでしょうが、これは一体何なのでしょう？死んでしまったら「チャラ」になる自らの裡に、様々な知識や感動を蓄えていく行為。それは限りなく非合理で非生産的ですが、ひとに与えられた本当に貴い資質なのかもしれません。

今という時代は、情報の豊かな時代です。かつて僕らが知り得たことなど優に越える、様々な情報が日々発信されています。たとえば、優れた研究や校訂による最新の楽譜が、次々に出版されています。誤植だらけのラヴェルの楽譜を前にして途方に暮れた日々を思い返すと、まさに隔世の感。幸せな時代になったと思います。もっとも、新しい情報をもれなくフォローするのも大変なことですが･･･。

しかし、ここで僕の申し上げたい知とは、自分の研究に関わることや日々有用なもの、ひとにひけらかす代物、などではない、自らの心の中に築く自分だけの知の財産や、感動の記憶のことです。それは誰のためのものでもありません。自分のためだけの密かな、しかし確かな、「心の図書館」とでもいうもの。そこに並ぶ本や体験の記憶に嘘があっては悲しい。見栄や体裁も時にはあったかもしれないけれど、年齢を重ねるほどに、そこには確かな志が見えてくるはず。この「心の図書館」とは、そのひとを映す鏡のようなものかもしれません。

もう鬼籍に入られた偉大な先達の巨大な「心の図書館」を、僕らは目の当たりにして来ました。考えられないほどご多忙の日々の筈なのに、間断なく展覧会や芝居に出かけられ、本を読み、折に触れてそれらの情報を真夜中にファックスして下さった畑中良輔先生。先生のお蔭で、僕は田中一村を知り、晩年の歌右衛門を観、P.ツェランを読みました。先生の作曲家との関わりは山田耕筰や信時潔に、文学者との交友も中河与一、川端康成、堀辰雄に遡るもので、その巨人の如き知識と経験は、90歳を越えても一層しなやかな感性に、結実していたように思います。

もとよりそんな偉大な例とはわけが違いますが、僕も密かに読書を続け、様々な舞台や絵画に触れ、心の裡に何かを蓄えていくことが出来れば、と願っていますが、さてさて･･･。

最近読んでいるのは、トーマス・マンの日記。実は別に存在した日記は、作家本人によって、生前焼却されていますが、それを割り引いても興味深い。直前に角田房子の本間雅晴中将と今村均大将の伝記も再読。いろいろ考えたばかりです。

●はなおか　ちはる　本学教授（ピアノ）